

今年度ももう終わりです。はやいですね。今年度最後といことで、今回は私のイチオシです！

『おれは歌だ おれはここを歩く』（アメリカ・インディアンの詩）
金関 寿夫／訳 秋野 亥左半／絵 福音館書店 1992年 1575円 絵本
＜お勧め年齢＞

幼稚園☆☆☆ 小低学年☆☆☆ 小中学年☆☆☆ 小高学年★★☆ 中学生★★★
高校★★☆ 一般☆☆☆

（★が多い年齢の子どもにお勧めです。）

＜本の紹介＞

まだ、人間が文学という形を持つ以前、言葉には魔力があった。言葉でつづられた詩は今のよう鑑賞するものではなく、実用のために作られた。雨を降らすため、闘いに勝つため、恋人の心を手に入れるため。

この絵本はそんな実用のためのアメリカ・インディアンの詩が、力強い絵とともに描かれています。もちろん現代の日本語に訳されたそれらの詩にかつての魔力はありません。それでもそれらの詩は、現代の私たちにも言葉の魔力を信じさせてくれるには十分な力をまだ持ち続けています。

＜子どもに手渡すときのポイント＞

詩について考えるとき、形式とか比喩とか主題とか表現とかについてついつい考えがちですが、太古の昔に戻ると言葉というものの本質が見えてきます。言葉には魔力があり、人間はその魔力で人間が支配しきれない自然の力と人間とを結ぼうとしてきたのです。

そんな実用のための魔力ある詩について詳しく知りたい方はぜひ巻末の「アメリカ・インディアンの口承詩」というページまで読んでください。また、本書と同著者の『魔法としての言葉 アメリカ・インディアンの口承詩』（思潮社）をお読みいただくとこの絵本の背景にある歴史や深い部分がよくわかり、子どもに手渡すときの紹介の仕方も変わってくると思います。



このコーナーで紹介した本はお近くの図書館や書店にあります。ぜひ手に取ってみてください。